

## 皆瀬中学校 12期 古稀お祝いの会

### 「同期会お祝い甚句」

奥宮・立岩 両小の 集い来たった 七十余名  
皆瀬の河の 檜木立 坂を上れば 我が校舎  
喧嘩をしての仲直り 板戸沼へのナベッコや  
大湯キャンプに 須川嶽 ダムの槌音 響く中  
共に学びし 春と秋 共に遊びし 夏と冬

作詞 高橋 三男

### <古稀の会 アルバム収録備忘録短歌集>

#### 「宴会前のひと時・・・」

皆中の古稀の祝いに集う皆 笑顔に溢れ後光射しけれ (逆光での記念写真)  
文集に「こずえ」と名づけし先生に 恋せし乙女ら古稀迎えけり  
古稀の会記念写真を撮り終えて 幹事を囲み感謝の写真  
久々に顔を合わせし懐かしさ メンバー替えて写真に納まる  
次々と記念の写真に納まりて 宴の開会待ちわびにけり

中学のふくよかな書体妙なりて ふくよかなまま豪農の主婦に  
耳鼻科にて見かけし技師の面影に 「私貞子よ」と声かけにけり  
(1年先輩の阿部幸雄(小南)さんが、貞子さんに会ったよと話してくれた)  
三人の美女の視線のその先に 光源氏がきつと立ち居り  
博多から旅の疲れが漂えど 古稀の集いをときめきて待つ  
古稀までの長き人生思い起こし 口を結びて噛み締めており

#### 「中学の頃を思い出して・・・」

畦道にバツケ顔出す北の春 入学式の新たな出会い  
初めての写生会にて声掛けし 手渡してくれた色は黄緑  
運動会ブルマー姿も目に眩し 胸の膨らみ気にかかる頃  
校舎裏車座で食べし弁当の 草の臭いの懐かしきかな  
文集のガリ版に向かう図書室の 触れ合う足に胸ざわめきぬ  
謄写版手に染み込みし青インク 拭いきれない思い出の有り  
檜木立瞼閉じれば風そよぎ 思春期の恋さわやかに過ぐ  
清流にシャツ着て泳ぐ乙女らの 胸透けて見ゆ思春期の夏  
大会の模型飛行機を飛ばす前に ゴム切れはじけ夢破れ去り

なべっこを担いで向かう板戸沼 焚火で作し味噌汁の味  
文化祭皆に振る舞う肉うどん 女子の手さばき見事に見えし  
収穫祭体育館に椅子並べ 鍬もて育てし小豆汁の味  
ストーブで温められし弁当の 臭い教室に満つお腹空くころ  
訪ね来て恋のやり取り語りたる 悩める乙女の秋夜長かな (卒業後のこと)

「古稀祝いの会が始まって・・・」

昔から度胸据わりし「ケン坊」は すくくと立ちて司会務める  
けん坊と呼ばれし友の手を振りぬ 過ぎ行く車に姿追いけり  
ガキの頃土蜂とりの名人も 時には頭にヨウチンの跡

「古稀の会の幹事長・・・実家の隣人・・・」

兄逝きて寂しさつのり友に乞う 古稀の集いの段取りのこと  
名所への観光バスを運転し お客和ます術会得せり  
学友の脛に浮かびし黙禱を 静かに捧げ宴始まりぬ  
駆けっこは一番だったと語りつつ 勉強苦手を笑い飛ばせり  
思春期のもどかしきこと出来る歳 「ほうらみてごらん」とデュエット歌う  
駆けっこの速い二人のデュエットに拍手する人曲探す人

「多郎兵衛旅館の十二代目当主の挨拶から・・・」

宿の主お国言葉で語りける 震災支援の一部始終を  
震災の惨状胸に去来せし 眼を宙にらみ静まりて聴く  
背を丸めとつとつと語る宿の主 避難家族の宿での暮らしを  
吾が友は湯治の癒しを現代(いま)に継ぎ 多郎兵衛旅館の十二代目  
古稀の宴主と女将が買い出しの ご膳整い座して開待つ  
四十二と還暦祝いに古稀の会 同期の集いみな世話になり

「博多で不動産鑑定士の友は、震災の被災地を何度も訪れているとか・・・」

博多より乗継ぎ乗継ぎ駆け付けて 熱き心で乾杯の音頭  
足伸べて体倒して声かけし 振り向きて聴く博多弁かな  
「棧敷あり九州場所を観に来い」と 校舎の裏の土俵仲間に  
遠来の友を迎えて杯挙げし グラス指差し何か問いけむ  
真顔にてきついジョークを飛ばしけれ 口を覆いてのけぞり笑う

「博多の友と新婚さんの所に泊まったことがある・・・」

若きころ新婚家庭に泊りこみ 議論を交わせし苦き追憶

「早くに夫を亡くし今も働いているという・・・」

人生の苦労は語らずマイク手に しみじみ歌う「みだれ髪」かな  
人生を歌詞に託して語りけり 逞しく生きしこの半世紀  
傍らで手をたたきて口ずさむ 吾も越え来し人生峠  
それぞれが何かを学び生きて来し 人生歌謡に拍手送れり

「高校で国語教師をしていた友は相撲甚句にはまっていると・・・」

生い立ちを相撲甚句の節にのせ 教鞭執りし友歌い上げ  
生い立ちの甚句の文句を追いながら 手拍子とりつつ走馬灯追う  
皆中の校歌もおぼろ古稀の会 思い出しつつ皆で唱和す  
先生も歌詞を追いつつ歌い出づ「若い二人」とデュエット続く  
足拍子見つめて歌うデュエットは 銀座の恋の物語かな  
高校の教師が歌うデュエットに 盃止めて微笑みて聴く  
両の手が何の仕草か知れねども 合い鍵を打ち鎖きて聴く  
ゆったりとくつろぐ二人に正座して 話にかだる（加わる）高校教師

「妻を亡くし再婚した友は・・・」

爪楊枝くわえし友は誇らしげ 釣り上げし鯛は二尺五寸と  
若き妻めとりし友はほのぼのと幸せ溢れほくそ笑みて飲む  
鯛釣りし幸せ者を指差して 笑み浮かべつつ何か語らむ

「深緑の太い蕨を茹でて故郷の香りを届けてくれた・・・」

故郷の山で手折りし蕨茹で 香り届けし汝が迎え居り  
二人してビール気にかけて歓迎す 話盛りて気にも止まらず  
世話役の務め果たせし宴半ば 八時半過ぎうどん食べけり  
それぞれに顔つき合わせ語りける 後ろを向きて誰と語らむ

「芸達者な友は宴会でいつも隠し芸を披露してくれる・・・」

歌う人次の曲をば探す人 大黒舞の小槌作る人  
頓智効くジョークを飛ばす芸達者 大黒舞を古稀の祝いに  
古稀の宴幸せ招くと言いつつ 大黒舞を一差し舞けれ

「久しぶりの再会に話は尽きず・・・」

古稀の宴秋田訛りも心地よし 家族を語る友みな元気  
お互いのつつがなしやを確かめて 互いの貌をまじまじと観る  
はにかみて話苦手な幼な友 歳を経し今は止まず語りぬ  
ご両人お酒進みて恵比須顔 箸は進まず話は弾む  
日焼けして野良で鍛えし面構え マイク持つ手の頼もしきかな

「小学校からの同級生だが、養女だったこと知らなかった・・・」  
汝に宛てて送りし写真戻り来ぬ 返送のわけ今明かされし  
幼な児が養女で育つ二十歳まで 養家に嫁ぎし運命（さだめ）語りぬ

「私に恋の手ほどきをしてくれたり、保護者のような親鳥さん・・・」  
親鳥がひよこを守る学芸会 親鳥のままに今も気遣う  
携帯の古里言葉の懐かしや 椅子にもたれて暫しまどろむ  
グラス手に指で促す思い出の うまく出てこぬもどかしきかな  
本当の気持ちはここにと訴えし 少し引きつつ受け応えせり  
やりとりを鼻に手をやり声かけず 幼馴染が笑みて見守る

「双子の弟は既に亡く、今度は兄が交通事故で亡くなったと・・・」  
古里の友が伝えし学友の 不運な事故に身をつまされし

[実家の真向いの同級生、大工に弟子入りし苦勞したという・・・]  
『菊の酒古稀の祝いと友の文 懐かし久し昔を語る』 中山 篤 詠  
黒々と筆の走りや古稀の歌 柱に掲げて多くを語らず  
達筆な筆で書かれた祝い歌 柱に貼りて友詠み上げし  
還暦に友に会えない時間（とき）埋めむ 想い巡らす記念写真かな  
還暦に出られなかった不幸あり 今ここに居る幸を写せり  
一時は博多暮らしの友二人 手尺で示し何か伝えむ

「村に残り農家を継いだ人、そして村を離れた人もいる・・・」  
実直に農家を継ぎて村守り この早魃を如何に憂いけむ  
古里を離れて久し幼な友 貌を見上げて話聴き入る  
「立岩」の思い出話も様々に 感極まりて涙溢れぬ

「長年の農家の主婦の苦勞話かも・・・」  
しんみりと何を語るか知れねども 右手支えの語り手聴き手  
村を出て街の農家に嫁ぎし汝は 「二三日泊まりたいわ」と呟けり  
真剣な眼差しで語る体験に 吾が身と照らし身を乗り出せり

「語り合う人の輪は時と共に動いて行った・・・」  
久し振り積もる話もそれぞれに ご膳を離れ自在に集う  
肩張らず見栄も張らない歳となり この満たさた時を写せり  
女子四人お膳を寄せてしゃべりけり 「もったいないわ」とデザートを指して  
「久しぶり」共に秋田に住まえども 暮らしそれぞれ会う易すからず

それぞれに積もる話を語りけり 集う輪できて解けてまたでき  
集う輪の時が流れて移り行く 話す相手も語る話しも  
三人と二人の話違えども 楽しき語らい伝わりて来ぬ  
しみじみと顔を見合わせ語りける 互いを気遣うゆとり漂う

二人とも小柄でキャシャな中学生 鍛え貫かれた逞しき手よ  
明け方の道路の除雪厳しけれ 腕は落ちねど今年で止めむ

「古稀の会に初恋の人を想い出し、忘れな草をあなたに歌う・・・」  
早春に歳の離れし兄逝きて 故郷もしだいに遠くなるらむ  
古稀の宴に十五の心思い起こし 「忘れな草をあなたに」歌う  
ビール手に「さあどうぞ」と勧められ 健康祈り杯を掲げむ  
ほろ酔いて友への酌に持つ酒は 『多郎兵衛旅館十二代目』

「古稀の宴の2次会にて・・・多郎兵衛旅館の12代目は中学の校長の息子である」  
中学で書を教わりし校長の 書凧として古稀を見つめ居り  
二次会も話は尽きぬ秋夜長 黙って見ている木地山こけし  
博多より長旅の友時間(とき)惜しや 兄との一夜過ごさんと帰す  
枝豆の豆の数ほどの思い出を 一粒一粒噛み締めて食む  
役所退き次の務めも無事終えて 野菜作りを楽しげに語る  
二次会の子の刻となるも尚止まず 尽きぬ話にはじける笑顔  
二人ともビールのラベルと同じ向き 視線の先に何事かあるらむ

「古稀の会 翌日の朝の散歩にて・・・」  
久々に朝訪れし不動滝 水面は深く碧く淀めり  
コンクリの裂け目に根ざすコスモスの 秋に花咲く逞しさ欲しや  
小柄でもコスモスの如くしなやかに 店の務めを続けているとか

「古稀の会の翌日は旅館のバスに乗り栗駒越えの小旅行・・・」  
バスの中夏のキャンプの話出づ 大湯温泉通りし頃に  
トロッコの線路を進みテント張り 汗流したる滝壺のいで湯  
夏休み十五の心ときめかし リュックの荷物出してはまた詰め  
夏休みキャンプファイヤー肝試し 怪談話のあの先生の声  
リュック負い七曲り越へ谷渡り 硫黄噴きだす須川に野営  
夜が明けてテントの周りに靴浮かび 雨風止まず登山諦め  
増水の谷渡れるかと偵察に 小走りで行き見て戻りぬ  
さあ下山思いリュックのその上に 濡れたテントを兄くくりつけ  
黒々と水嵩増した沢渡る ロープを掴み滑る石踏み

雨が降る林道下る七曲り 線路伝いに湯元に急ぐ  
辿り着き体操場に避難して 荷物投げ出し手足伸ばせり

「小安温泉近郊の思い出の地を阿部幸雄さんと訪れて・・・」  
冬最中火災に遭いて失いし 思い出探し古里を旅す  
貝沼は釣り糸をたれる人もなし 黄昏写し湖面キラめく  
紅葉の水深まりし皆瀬ダム 水門閉じて水谷を上る

友人に写メール送る桁倉の 紅葉濡らした秋雨の止む  
河原ゲは不毛の山ぞ地獄絵図 硫黄噴き出し止まず息づく  
小安峡身体を包む湯煙の 熱気頬なで秋風の過ぐ

五十路経て思い出探すキャンプ地の 沢のいで湯に『阿部旅館』建つ  
栗駒に群生したるイワカガミ 今はいずこに潜み咲くらむ  
栗駒の伏流水の冷たさよ 邪心清める神の水とか

須川湖の紅葉散て寒々と 黄葉留まりて湖面に映える  
雲間より強い光の一筋が 秋のパノラマ照らし過ぎ行く  
谷渡る大橋に立ち見下ろせば 紅葉を縫う七曲り見ゆ

馬草岳残雪写す須川湖の 澄みて静なる心持ちたし  
須川湖の水面に写る残雪は 思い出繋ぐ踏み石の如くに

「山越えし栗駒高原駅まで送ってもらい、那須高原の大学の同期会へ・・・」  
吾がために山越えしける学友の 顔焼きつけて一人車窓に  
帰り路の共に行けない寂しさや 一人車窓に栗駒見上ぐ  
黙禱を捧げる時間も増えゆかむ いざこれからぞ共に達者で

古稀の会では、幹事さんのお世話になり皆さんと楽しい一夜を過ごすことができました。ありがとうございました。その上私の我儘で栗駒高原駅まで送っていただき申し訳なく思うと同時に、最後までご一緒できなかったことが今でも心残りです。

その後、家の帰りスナップ写真をみながら思い出を噛み締めております。このスナップの殆どが恵時さんに撮ってもらったものですが、写真をみながら思いつくことを備忘録短歌にして書き添えてみました。勝手な想像で作りましたので、事実無根であることをご容赦くださいますようお願いいたします。

平成二十四年九月八日 小南 毅